

あるトルコ軍人の日本論 (1)

—— 日露戦争観戦武官ペルテヴ・パシャのみた日本 ——

A Turkish Officer Pertev Paşa's Observation on Japan (1)

横井敏秀

YOKOI Toshihide

1. はじめに

1904年8月11日、遙か極東の地に向けて帝都イスタンブルを出立する1人のトルコ軍人の姿があった。彼の名はペルテヴ（ペルテヴ・デミルハン *Pertev Demirhan*、のちにパシャ *Paşa* の称号をもって呼ばれる）、オスマン帝国陸軍の参謀大佐である。その使命は、日本軍付きの観戦武官 (*ataşemiliteri ve askeri murahhası*) として日露戦争に従軍し、戦争の実情を身をもってつぶさに観察することであった。帰国後彼は、日露戦争の回想記をはじめとする数冊の日本関連の著書を発表する。そこには、トルコ軍人の眼に映じた日本および日本人のありさまが物語られ、かつ仔細に批評されている。彼は日本に何を見出したのか。その諸々の観察や発見は、彼自身の信念や祖国への使命感とどのように結びついていたのか。本稿は、ペルテヴが日本について書き残した事柄を、入手しうる限りの本人の著作に基づいて明らかにすることにより、歴史に埋もれたこのトルコ軍人のメッセージを掘り起こす試みである¹⁾。

2. ペルテヴ・パシャの略歴と著作

ペルテヴ・デミルハンは、1871年にイスタンブルで生まれ、1964年に93歳の長寿で死去している。トルコの陸軍士官学校卒業後、参謀教育を受けるためドイツに留学する²⁾。とくにドイツ陸軍きっての戦略家・軍事学者として著名なコルマル・フォン・デア・ゴルツ (*Colmar Freiherr von der Goltz*)³⁾ に師事した。上にもあるように日露戦争中にはすでに陸軍参謀大佐として勤務している。1904年、観戦武官として極東に派遣され、旅順、奉天の戦場を目の当たりにする。旅順では観戦中に脚に弾丸が命中して軽傷を負っている⁴⁾。帰国してのち、最後には将軍となり、陸軍参謀本部長の地位まで昇りつめた。退役後はエルズルム選出の国会議員として活躍した (*Komatsu, 2007: 73*)。

ペルテヴはドイツ語で書いたもの⁵⁾を含め、多くの著作を遺しているが、そのうち日本および日本人にかかわる著作には次の3つがある。

- ① *Hayatımın Hatıraları : Rus-Japon Harbi 1904-1905 (Birinci Kısım) İstanbuldan Ayrılışımdan Port Arthur Muharasasına Kadar*, Matbaai Ebüzziya, İstanbul, 1943. (『わが人生の回想 日露戦争 1904-1905 [第一部] イスタンブルを離れて旅順攻囲戦へ向かうまで』以下『日露戦争』と略)。
- ② *Rus-Japon Harbinden Alınan Maddi, Manevi Dersler ve Japonların Esbab-ı Muzafferiyetleri*, İstanbul, 1913. (『日露戦争の物質的および精神的教訓と日本軍勝利の原因』)。
- ③ *Japonların Asıl Kuvveti : Japonya Niçin ve Nasıl Yükseldi?* (İkinci basım), Cumhuriyet Matbaası, İstanbul, 1942 [1937]. (『日本人の真の力 —— 日本はなぜ、またいかに興隆したか』初版 1937、

第 2 版 1942)。

最初の『日露戦争』という著作は、1943 年、すなわち第二次世界大戦たけなわの頃に出版されている。ペルテヴは、この本の序文で、「この 3 年来書いている『わが人生の回想』から、1904 年～1905 年の日露戦争に関する部分を取り出して、わが同胞へ紹介することに着手した」と述べている (Demirhan, 1943 : 5)。この一節から、『日露戦争』が、彼の回想記ないしは自伝の一部をなすものとして構想された著作であったことがわかる。つまり、タイトルから想像されるような、日露戦争の戦記ではなく、日露戦争時代の観戦武官としての回想記 (実質的にはトルコを発って旧満州の戦場に到着するまでのいわば旅行記および日本滞在記) である⁶⁾。それゆえ、叙述の仕方も日を追っての日記形式をとっており、1904 年の 3 月 17 日に始まり、同年の 10 月 16 日で終わっている。

この書物は当初、二部構成で出版される予定であった。そのことは、「(第一部) イスタンブルを離れて旅順攻圍戦へ向かうまで」と題されていること、また、本の背表紙に近日刊行の書物として『日露戦争』の第二部が「旅順攻圍戦」というタイトルのもとに予告されていることから推測できる。しかしながら、トルコ国内の主要図書館の蔵書カタログには、当該の文献の名を見出すことができず、トルコ本国の研究者が、トルコと日本の関係史についてまとめた著作においても、ペルテヴの『日露戦争』は「第一部」のみが言及されるにとどまっており、巻末にある参考文献一覧表にも、第二部の名は挙げられていない (Şahin, 2001)。こうした事実から推測するに、第二部は現時点ではその理由が不明な何らかの事情によって、刊行されることがなかったと思われる。

ともあれ回想記『日露戦争』の後半を目にすることができないのは、それがまさにペルテヴ自身の戦場での観戦記を内容とするものであったと思われるだけに、たいへん残念なことである。

しかし、ここで注目されるのが 2 番目に挙げたペルテヴの著作、『日露戦争の物質的および精神的教訓と日本軍勝利の原因』である。この本は、ペルテヴが観戦武官の任務を終えてトルコに帰国したあとで行った講演の速記録である。1913 年に、120 ページのトルコ語単行本として印刷・出版されている (内藤, 1968 : 90)。タイトルからそれと知られるように、その内容は、観戦武官としての日露戦争の実態の報告をテーマとしたものである。したがって、この本を参照すれば、『日露戦争』の「第二部」がたとえ未刊でも、ペルテヴが観戦武官として戦場で何を見たか、その内実を把握することができるはずである。

もっとも、今回この文献を直接入手することがかなわなかったため、筆者は現物を参照していない。だが幸いなことに、トルコ研究の草分けの 1 人である内藤智秀が、かなり以前に、『日露戦争の物質的および精神的教訓と日本軍勝利の原因』の内容を要約したものを雑誌論文の形で簡略に紹介しており、それを参考として、書かれている事柄の大要を知ることができる (内藤, 1934)。それによれば、ペルテヴはこの著書において、満州の戦場で直接目の当たりにした日本軍の戦いぶりに関し、多くの事例を挙げながらその状況と特質を論じており、それらはおそらく未刊にとどまった回想記『日露戦争』第二部において描かれるはずだった事柄を補完する意味合いをもつと考えられる。

3 番目の本『日本人の真の力』は、日本の古代から日中戦争勃発前 (第 2 版では太平洋戦争の緒戦時まで) に至る日本の国民精神の歴史を簡潔にたどった著作である。筆者の手許にあるのは第 2 版だが、その中でペルテヴは近代以降の日本の「目覚しい発展」と、太平洋戦争における当時の日本の「華々しい戦勝」をもたらした原動力とは何かについて、その歴史的根源を明らかにしようとしている。一言しておくべきは、この『日本人の真の力』にも、日露戦争に言及した箇所が多数含まれており、それは概ね『日露戦争の物質的および精神的教訓と日本軍勝利の原因』の要約であるということである。すなわち、直接参照できなかった 2 番目の本の内容は、『日本人の真の力』を読むことでもその概略を把握することが可能である。

本稿では、入手しえた①と③を主として参照することで、彼の日本論の内容とその含意に迫りたいと思う。

3. 観戦武官任命の経緯

ペルテヴが観戦武官として日露戦争に従軍したのは1904年の秋から1年余のことであった。観戦武官とは、外国の行う戦争に派遣されて、戦争の状況を実地に視察し、本国に報告することを任務とする将校のことである。日露戦争が始まると、とくに欧米諸国は競って観戦武官の派遣を日本とロシアの両国に申し入れた⁷⁾。日露戦争は、当時最新の兵器を装備した、よく組織された軍隊同士の本格的な衝突であったことから、文明国間において将来生起すべき戦争のありようを予測する上で重要な情報を提供するとみなされた（ハワード、1995：636-639）。そのことが列国の関心を大いに刺激し、観戦武官の派遣を促したと考えられる⁸⁾。

オスマン帝国の場合は、これに加えて特殊な事情が伴っていた。1890年に起こった「エルトゥールル号遭難事件」⁹⁾を契機として、すでに日露戦争以前に、日本とトルコの交流の端緒が開かれていたとはいえ、まだ日本はトルコにとりほとんど未知の異国であった。だが、日本とロシアが開戦するや、トルコ人はこの戦争に格別の関心を寄せ始める。18世紀以降、オスマン帝国にとって北方の巨大国家ロシアとその南下政策はまさに眼前の生々しい脅威であった。両国の間には前後6回にわたり戦争が行われているが、その都度トルコは敗北し、ロシアに領土を侵食されてきた。そうした経緯があったため、極東の小国日本が「仇敵」大ロシア帝国と渡り合い、これを撃破しつつあるというので、トルコ人は日本の勝利をわがことのように欣喜雀躍したのである（松谷、1986：32-33）¹⁰⁾。しかもオスマン帝国政府にとっては、ロシアが極東へ矛先を転じることにより、自国に対するその強圧が一時的ではあれ軽減されることは、至極歓迎すべきことであった（Şahin, 2001：146）。

次のような発言には、当時のトルコ人の、日本の勝利を祈る熱い想いが表白されている（*ibid.*：146, 147）。

「その年（1904年）、日本とロシアの戦争が勃発した。私は日本の勝利を神に祈り始めた。それはロシアの鼻高々の驕慢さが打ち砕かれ、頭を垂れるようにと念じたからである。私はまさに、日本の陸海軍の精神的な司令官であった」（ハリル・イブラヒム）。

「日本の成功はわれわれの喜びである。ロシアに対する日本の勝利はわれわれの勝利とみてよい」（スルタン・アブデュルハミト二世）。

日露戦時の日本への観戦武官の派遣も、この時期日本に対して急速に高まった関心と親近感が背景にあったと考えることができよう¹¹⁾。

さて、回想記『日露戦争』は、実質的には彼が観戦武官任命の内示を受けるところから筆が起こされている。以下、『日露戦争』の記述に拠りつつ、ペルテヴが極東赴任を命じられてから、長い船旅を経て日本に到着し、大陸の戦地に赴くに至る経過を概ね時間の流れに沿って紹介したい。そこには、日本行きが正式決定されるまでの幾分の曲折をはらんだ経緯、日本到着後の各地での見聞や日本人との接触のありさまとそれについての彼の印象・感想、戦地に赴く輸送船上での日本兵士たちとの交歓等々が、生彩にとんだ筆致で活写されている。

1904年3月、ペルテヴは父を失う。悲嘆にくれていた彼にとってのわずかな慰めは、陸軍参謀本部における参謀教育の教官として、3年次の学生向けに実施していた「著名な戦闘を論ず」という講義に打ち込むこと、そして同年2月8日（ペルテヴは9日と記している）夜、日本海軍が旅順軍港のロシア艦隊を奇襲攻撃することで戦端が開かれた日露戦争の情勢を、新聞や、とくにドイツの新聞・雑誌を通して追跡することだった。彼は戦況の推移に格別の関心を寄せ、学生たちへも日本海における艦隊行動と満州での陸軍の戦略・作戦を地図上で説明している。そして作戦の進行状況からみて、日本軍の勝利は間違いないと信じる旨学生に告げたところ、彼らは大いに喜んで興奮に包まれ、それを見て自分自身歓喜を覚えたという。

6月12日、宮廷の書記官イゼット・パシャ（İzzet Paşa）から突然に召喚され、何事だろうと戸惑いながら参内する。すると期せずして、かのフォン・デア・ゴルトツ将軍が、貴官を極東の戦場へ派遣すべしとして熱心

に推薦しており、皇帝陛下も同意されていると聞かされ、降ってわいた幸運に有頂天になる。これがすべての事の始まりであった。

だが、出発が正式決定されるまではまだ曲折があった。6月17日、書記官イゼット・パシャは前言を翻すかのように、「日本への派遣については、まだ明確なことは決まっていない。諸外国が同意するなら、行くことになるだろうが……」と言い始めて、ペルテヴを当惑させる。彼はイゼット・パシャの言う「諸外国」とはおそらくロシアのことだろう、と直感する。トルコは一方で対戦国のロシアにも観戦武官の派遣を申し入れていたが、ロシアは自国の敗北のさまをトルコに見せたくないゆえ、それを望まないであろう。現にロシアから何の返答もない。スルタンはロシアを刺激しないために、日本への観戦武官派遣についても、これを差し控えるのではないかと予想したからである。事実その後も、日本行きの正式命令は待てど暮らせど発令されず、彼の懊悩は深まった。けれども彼は一縷の望みをつなぎ続けた。

その間、恩師ゴルツ・パシャから届く手紙は彼のまたとない励ましとなった。彼はゴルツ・パシャを、「父のごとく常に私を慮るこの心の広い人物」と仰ぎ、厚意を深く謝している。

8月1日に至り、漸くにして大宰相府から日本への派遣が発令された。すぐさまペルテヴは旅の準備にとりかかった。書記官イゼット・パシャからは、皇帝陛下に提出するために、戦争に関する報告書を定期的に自分に送付するよう命を受けた。この報告書の内容の一部は、執筆の都度回想記『日露戦争』に記されている。

8月初め、ペルテヴは陸軍省や外務省の要路の人々に面会するとともに、参謀本部の同僚に別れを告げる。

8月10日の項には彼は記している。「明日ついにイスタンブルを離れる。私の前には新しい地平が開けている。まず……エジプトへ、そこからドイツの汽船でアデン、コロンボ、香港、上海を通って横浜へ行くことになる。元気でいられるなら、戦争のあとアメリカ経由で祖国へ戻ろうと思う。こうして世界を一周してしまうつもりだ」と(以上 Demirhan, 1943 : 7-16)。

4. 日本到着まで

1904年8月11日、ペルテヴは海路イスタンブルを出立する。本人が述べているとおり、エジプトの諸都市を振り出しに、各地に寄港しながら日本にまで至る長途の航海への旅立ちであった。

船旅の途次、彼は時折船上や寄港地で日露戦争についての情報を入手している。アレクサンドリアでは、あるドイツ人から、ウラジオストックと旅順のロシア艦隊が悲惨な状況にあることを聞かされ、「一刻も早く日本へ着きたいという思いで心が震えた」と記す(8月15日)。コロンボでは、英国の電信を通じて、遼陽近郊で3日間にわたり大規模な野戦が起り、ロシア軍が敗北したこと、日本軍が旅順の3つの要塞を奪取したこと、等々の知らせを得ている(9月3日)。

エジプトのポートサイドで、戦争視察のため日本に派遣されるドイツ皇族カール・アントン・フォン・ホーエンツォレルン(Karl Anton von Hohenzollern)親王およびその随員ブロンザルト・フォン・シェレンドルフ陸軍参謀少佐¹²⁾とともにドイツ汽船に乗り込む。

このポートサイドで、ペルテヴは書記官イゼット・パシャに命じられたスルタンへの報告書の最初のを執筆している。カール・アントン親王との談話の内容を交えながら、ロシア軍は陸戦では敗北し海軍も制海権を失い、すでに手詰まり状態であると述べて、「ロシア軍はかつての露土戦争から何ひとつ学びえていない」と痛烈な批判を浴びせている。「実際、傲慢なロシア人は、この極東の戦争を機に自らがどれほど無力で腐朽しているかを世界の注視する中で立証してしまった。そして以前に国家の拡大膨張によって得た評価を、今日一切合財、おそらくは再び回復不能なたちで失うことになった」(8月23日)。

また、長崎到着直前の寄港地上海でも、ペルテヴは2通目の報告書をまとめている。そこでは、旅順から逃れて上海に避難し、武装解除されたロシアの装甲巡洋艦2隻と砲艦1隻を目撃したこと¹³⁾、その士官たちが上

海入港の翌日、早速舞踏会を開いて楽しんだこと等を報じて、ロシア軍人の「弛緩した気分」を難じている。また、遼陽会戦で日本軍が勝利を確定したことに触れて、このように日本が打ち続く戦勝によって次第に極東での影響力を強めつつあることに、フランス、ドイツのみならず同盟国のイギリスさえも警戒心を抱き始めていることを指摘する。そして、「日本人が科学と技術の世界のあらゆる分野で示している大いなる進歩」は、この堂々たる勝利の余勢を駆って、「将来、西洋列国の極東における地位と立場を驚くほど動揺させることもありうるだろう」と予測している(9月20日)。

さらにペルテヴは、エジプトのカイロでピラミッドを見物した際に雇ったアラブ人の案内人が、彼がムスリムで日露戦争に従軍するということを知ったとたんに、自分をひどく尊敬したこと、またロシア人はギリシア正教の信者とはいえムスリムにとっては「啓典の民」とみなされており、片や日本人は異教徒また無宗教者であるにもかかわらず、民衆は皆こぞって日本に好意を寄せ、ロシアの敗北を望んでいることを「すこぶる不思議なこと」として書き留めている(8月19日)。

その一方で、西欧の植民地のくびきの下にあるアジア諸国民のありさまは、彼に大きな衝撃を与えたようである。「エジプトは私に多大の印象をもたらした。東洋の、またムスリムの諸国民がこれほどまでに没落していることを目の当たりにして、私は耐え難い思いに駆られた。イスラム教とムスリム諸国民の興起のため、なしうの限り努力することを私は自らに誓った」(8月20日)。「東洋、イスラム、トルコ世界およびわがオスマン国家の繁栄と安泰を目にすることが、私の人生で最大の幸福である。いつの日にか、これに立ち会うことができるだろうか?」(8月25日)。(以上 Demirhan, 1943: 17-66)

5. 日本滞在記

9月21日、船はついに九州五島列島の海岸線を望見する地点に達する。緑が豊かで、地形の変化に富んだ日本の風景は、ペルテヴにはたいへん心地よく映じたようである。「海岸に近づくとつれて、この国がどんなに優美であるかが、次第によりよくわかってきた。日本から受けた最初の印象は、とても好ましいものだった」と彼は書いている。彼の手記には、日本の景観美を描写する言葉として、「優美 (latif)」「絵画的 (pittoresk)」「詩的 (şairane)」などの言葉がよく用いられている。瀬戸内海を航海したときの一節には、「どのあたりも子ども時代に常に幻の中をよぎった、時折夢にさえ見た場所のようだった」という表現があるが、ペルテヴにとり、日本の風景は不思議にあるノスタルジックなデジャ・ヴュを呼び起こすものでもあったらしい。

途中で寄港した都市で間近に見る日本の民衆についても、彼はたいへん好意的な感想を綴っている。とくにその清潔さ、秩序正しさ、誠実さには強い印象を受けた旨述べている。たとえば、「日本は万事が清潔であり、民衆が丁寧で儀がよいことについて、私には……とてもいい印象が生じた」というように。

また、日本女性の優雅さにもいたく魅力を感じたようである。芸者や舞妓の「民族(日本)舞踊」を見物して、「私が知っているものとはまったく異なる旋律と舞踊によって、この世界は美しい夢、甘い幻影のように思われた。すこぶるいい印象に支配された」と、彼は少々夢心地になっている。

日本に着いてのち、寄港した長崎、神戸の風情を楽しみながら、ペルテヴは横浜に到着し、そこから汽車に乗り換えて東京へと向かう。9月25日のことである。東京では、帝国ホテルに一時の住まいを定めた。彼は東京の街が巨大で人口が密集し、股脈を極めていることに素直に驚いている。ただ、彼にとって不幸なことに、日本とトルコは実はまだ正式の外交関係を持っていなかったため、東京にはオスマン帝国の公使館が存在せず、彼はすべての仕事を自分自身で行わざるをえなかった。トルコ領事館も、まだ日本のどの都市にも置かれていない状態であった。

東京に着いてのち、ペルテヴは早速書記官イゼット・パシャに送る3通目の報告書をしたためるが、その一節には、今後の日本の対露戦略や、国内の予備兵力の動員状況などについて述べたあとに、当時の日本人の戦

争に対する決意と、戦時下の雰囲気について、次のように書かれている。すなわち、「この真剣な兵員の調達と他の多くのしるしは、日本政府が現在の戦争を何が何でも勝利のうちに終結させたいと望んでいることを示すものである。日本人は4,700万に及ぶ人口を持ち、全員が1つの民族、1つの思想にまとまり、指導者にこの上なく忠実で従順な国民であって、国家の将来と安泰のため、今日までまだ類をみない激しさと勢いで敵を根こそぎ粉砕し圧倒することを熱望し、心に期している。

だが、すべての民衆はいたずらに興奮したり街頭行動を行ったりすることをせず、基本的に東方の民特有の、天命に委ねる平静さをもって結果を待ち受けている。……長崎、神戸、横浜の港では戦争状態の印ひとつ見られない。皆が平時と同様に仕事に懸命にいそしんでいる。……

……ロシア国内で今日支配している混乱、騒擾とその結果として生じている数多くの有害な状況を想起するなら、この2つの国民の人格的美質の間に物質的、精神的にいか大きな相違があるかが知られよう」。

また、4通目の報告書でも次のように述べて、日本国民の表面上の落ち着きと静けさに秘められた戦争準備の着実さ、完全さを指摘している。東京全市は日本陸海軍の戦勝とロシアの敗北に関する絵や写真やその他の標示で満ちている。天皇陛下や戦争で大功を立てた司令官や提督たちの写真がいたるところに飾られている。これまでの戦い、とりわけ最近の遼陽の野戦で日本軍の被ったたいへんな損害にもかかわらず、市民は歓喜している。国全体があたかも平和と平穏さの中にあるかのように、秩序と静けさがみられる¹⁴⁾。外見上何らの戦争の状態も目撃されない。この状況は、日本がいかに完全な形で戦争を準備したかを示している、と。

さて、東京でペルテヴは、開かれたいろいろの会食に招かれて、日本政府や陸海軍の要人たちと接触し、会話を通じて情報を交換している。その中には、桂太郎首相、小村寿太郎外務大臣、山県有朋参謀総長など、当時の内閣や統帥部の重鎮が含まれる。彼らがペルテヴに語った言葉は、やはり4通目の報告書に記録されている。山県有朋：「現時点ではわれわれはうまく戦争を進めている。だがロシアは巨大な国家であり、とても強力であって、戦争を猛烈に続行することを望むだろう。そのため、本当のところわれわれは、今後たいへん困難な務めを果たさねばならなくなるだろう」。小村寿太郎：「戦争の今までの期間はその始まりに過ぎない。両国は兵力補充に力こぶを入れているし、とりわけロシアは戦場に新たに大兵力を派遣することを企てているから、本当の戦争は今からのちに始まるだろう」。桂太郎：オスマン帝国に多大の関心と友情を示し、「オスマン軍から満州の戦場に1人の将校が任命されたことはとても光栄です」と語る。

ペルテヴは一方で、「日本軍当局が私について示した尊敬と厚遇はまさに大きなものがある。軍当局と、日本人一般のオスマン帝国への友情ときずなは常にしるしとなって現れている」と述べて、日本の対応に感謝している。だが、日本の軍当局は、機密の漏洩を恐れて、外国の武官が活発に情報収集することに警戒感を抱いていたようである。彼の手記にも、それがうかがえる。「日本参謀本部は軍の作戦行動ともろもろの措置が漏洩することを過剰に用心して、外国の将校であれ、新聞社の特派員であれ、重要性をもたなくとも戦場から文書、報告書、電信を送ることを好ましく思わず、まさにこのために、彼らが望む事柄を目にすることを丁重に謝絶している」。

ただ、ペルテヴはそうした状況に失望せず、むしろ自分の任務を前向きに考えようとしていた。彼は報告書の中で、次のように意欲を吐露している。「私は自分に恵まれた特別な機会を利用し、できうる限り多くの事柄を目にして、この先全身全霊を傾けてわが軍への情報提供に貢献することを可能となすべく堅く決意している。また、これはひとえに戦場において日本の司令官たちと日本参謀本部の信頼をかちうることによって可能となる」と。

忙中閑あり、ペルテヴは東京到着以来、公務の合間に銀座、増上寺、上野公園、吉原、浅草などを遊びに見物している。「日光を見ないうちは結構と言うな」との言葉に惹かれて、日光に出かけた様子も綴られている。東照宮を見学して、「自然の原理と祖先崇拜よりほか何ものもない『神道』の教理が、文明のこれほど進んだ日本国民の上に、まだいかに呪術的な影響力を揮っているかを考えた」と、ムスリムらしい感想を漏らしている。

さて、10月1日になって彼は、旅順を包囲している乃木第三軍の観戦武官として配属されたことを知らされる。この報に接したとき、少々落胆したと彼は記している。なぜなら、旅順の戦いは長引きそうな気配であり、そこに張りついていると、北方の奉天周辺で起こるはずの大規模な野戦を見られなくなると懼れたからである。だがあとで、「すべてのことには益がある」と考えて——これはむしろ要塞攻略戦と、それが終わってから大規模な野戦と、両方を見る機会になるかもしれないと考え直して、自分を納得させたとも述べている。

配属先も決まったところで、10月5日には参謀次長の長岡（外史）少将がペルテヴの送別会を高級料亭・芝の紅葉館で催してくれた。大いに宴会を楽しんで、最後は「賞賛のしるしに」胴上げされている。「バンザイの歓声に包まれて、優美な芸者たちが車まで見送る中を、名残惜しく紅葉館を去る際には、私は夢を見ているような心地であった」と、またしても夢心地である。

10月8日、東京を出発し、横浜から日本軍の輸送船に乗って大阪経由で旅順近郊の大陸の玄関口・大連に向かう。船上で日本軍の将校たちがペルテヴの壮行会を開いてくれ、40～50名の日本軍将兵とともに宴席を囲んだ。彼は日本の将校たちとたいへん親しく交流している。ある日本軍少佐は「他の外国の将校にはこのように打ち解けることはできない。ロシア軍はあなたにとっても敵である。あなたには心を開いている」と言った。ペルテヴは感に堪えたように記している。「酒中に真実あり」というけれど、「将校たちが示してくれた友情と誠意には、見せかけも不実さもなかった」と。

宴会の様子描写はなかなか臨場感がある。たとえばこんな具合である。

食事が終わってから民謡が始まった。まず船の兵站担当者が調子を取りながら両手でテーブルをたたいて目を細め、顔をしかめて、興奮してわれを忘れたといった様子で日本の民謡を歌うと、将校たちは口を揃えて「はい」とか「おお」という声を発して感情を表現した。民謡、軍歌が次々と歌われ、「家族と離れて(?)」という心を揺さぶるメロディが演奏された。皆この旋律を厳粛に沈黙のうちに聞いていた。最後に副船長が、音頭をとってピアノで「かっぱれ」なる有名なゲイシャダンスの曲を弾いた。楽しいメロディに一同陽気になった。……

ペルテヴは、10月14日、大連に到着し、大陸に最初の一步を印す。そして、赴任地である旅順の前線へと歩みを進める。ここで『日露戦争』第一部は終わっている（以上 Demirhan, 1943 : 67-134）。

（続く）

【註】

- 1) ペルテヴ・パシャを主題として扱った先行研究はほとんど存在しない。小松香織の最近の論考（Komatsu, 2007）は、日露戦争のもたらした日本イメージがトルコの近代化において果たした役割という文脈で、アブデュルレシト・イブラヒム（Abdürreşid İbrahim）と並んでペルテヴの著作を取り上げ、考察を加えているが、その意味でたいへん貴重な研究といえる。
- 2) 言うまでもなく、当時のオスマン帝国陸軍はドイツ陸軍を師表と仰いで軍の近代化を進めていたという事情が背後にある。ちなみにドイツ軍に模範を求めたのは明治期の日本陸軍も同じで、この点で明治の日本軍とオスマン帝国軍はドイツ陸軍を師匠とした兄弟弟子の関係にあるといつてよい。
- 3) フォン・デア・ゴルトは多年にわたりオスマン帝国に招聘され、陸軍の改革に心血を注いだ。フォン・デア・ゴルトとトルコの関係については、（Çalık, 1996）参照。
- 4) 山県有朋は、その際の状況と、ペルテヴの負傷が大事には至らなかった旨を、電信によってイスタンブルに通知している（Şahin, 2001 : 135）。
- 5) たとえば、フォン・デア・ゴルトの評伝 *Generalfeldmarshall Colmar Freiherr von der Goltz, Das*

Lebensbild eines grossen Soldaten, Göttingen, 1960. など。

6) ちなみに、小松香織・小松久男は、アブデュルレシト・イブラヒム『ジャポニヤ』の「訳者あとがき」において、「オスマン帝国において、『日本』という国の存在を紹介する本が出はじめたのは19世紀末以後のことである。しかし、それらはすべて西欧の書物の翻訳にすぎなかった。〔日本および日本人論として〕トルコ人の手になる最初のものとしては、日露戦争の観戦武官として極東に派遣されたオスマン帝国軍人ペルテヴ・パシヤの、『日露戦争』(1905 / 1906年刊)があげられる。しかし、これはあくまで戦記として書かれたものであり、その中の日本を紹介する箇所はやはり西欧文献の引用にとどまっている」と述べている(イブラヒム, 1910=1991: 407)が、ここでペルテヴが書いたとされる「1905 / 1906年」に刊行され、「あくまで戦記として書かれ」、「西欧文献の引用に基づいて日本を紹介した」『日露戦争』という書物については、その所在を未だ確認することができない。ペルテヴ自身、そうした著作について言及していない。今回資料として用いた『日露戦争』という書物は、タイトルこそ同一ではあるが、1943年に出された、著者自身の体験に基づいて書かれた回想記である。しかも序文の中で著者ペルテヴは、この回想記では当時日々書き綴っていた日記を素材として、とりわけ戦場において実際に自ら見聞きした事柄をそのまま提示するというやり方を選び、その後学んだ事柄があったとしてもそれをあえて付け加えることをもしなかった、と明言している(Demirhan, 1943: 6)。このことから、先の書物とはまったく別物であることは疑う余地がない。ただ、小松香織は最近の論文において、ペルテヴの著作として紹介したリストの中に1943年の回想記を含める一方で、「戦記」としての『日露戦争』については触れておらず、後者の存在については事実上否定されたと考えられる(Komatsu, 2007: 73)。

7) 安岡昭男(安岡, 2003: 72-83)によれば、日本が迎えた外国武官は、現在明らかになっているだけでも、13ヶ国、70名以上を数えるとみられる。13ヶ国とは、イギリス、アメリカ、ドイツ、オーストリア・ハンガリー、スペイン、イタリア、スイス、ノルウェーおよびスウェーデン、ブラジル、チリ、アルゼンチン、そしてトルコを指す。欧米の主要な国々だけではなく、南米諸国とトルコが加わっているのが目を惹く。13ヶ国のうち最も人数の多いのはイギリスの33名、最も少ないのはチリ、アルゼンチン、トルコの各1名ずつであった。イギリスがとくに多いのは、1902年に成立した日英同盟が関係している。なお、アメリカの観戦武官の1人にはダグラス・マッカーサー元帥の父である、当時のフィリピン派遣軍司令官アーサー・マッカーサー陸軍少将がおり、何か日本との因縁を感じさせる。

各国の観戦武官は、それぞれ本国に報告書を提出しているが、たとえば英国ではその数は239点の多きに上り、それらを集成して *THE RUSSO-JAPANESE WAR: Reports from Officers Attached to the Japanese Forces in the Field* (5 vols) が作成された。それらは近年日本でも『日露戦争英国参謀本部機密文書集全5巻』として復刻版が出版されている(2000年、日本シノプス刊行)。また、アルゼンチンの海軍武官マヌエル・ドメック・ガルシア大佐は日本海海戦当時、装甲巡洋艦「日進」——日露戦争直前に日本がアルゼンチンから購入した軍艦——に乗艦して、海戦の状況を目の当たりにした人物だが、その観戦報告は全5巻1400ページにも達するという。このうち第1巻と2巻が最近邦訳され、『日本海海戦から100年—アルゼンチン海軍観戦武官の証言』(2005〔1998〕)というタイトルで刊行されている。

また、個人的に従軍記を執筆・発表した者もいた。英国の首席武官であったイアン・ハミルトン陸軍中將は黒木將軍指揮下の第1軍に従軍し、毎日の見聞を克明に書きとめており、外国軍人の眼に映った当時の日本軍の姿を知る上でたいへん貴重な記録となっている。その内容は戦前に出た邦訳で読むことができる(Hamilton, 1907=1935)。

8) スイス陸軍中佐フリッツ・ゲルチュ(Fritz Gertsch)が観戦武官として日露双方の戦場へ派遣されることを請願した際、「ロシアと日本の戦争は、1870年以後、戦争がないので、組織、軍備、教練の点で、どの国の近代陸軍にも教訓を与えるであろう」との請願理由を挙げているのは、その1つの事例とみなしうる(中井,

2004 : 178)。

- 9) 「エルトゥールル号遭難事件」とは、スルタン・アブデュルハミト二世の使節として日本へ派遣されたフリゲート艦「エルトゥールル号」が、トルコへの帰国の途中、運悪く台風に巻き込まれ、和歌山県檜野崎灯台付近で座礁沈没、特使オスマン・パシャ以下ほとんどの乗組員が死亡するという悲運に見舞われた事件である。当時の大島村村民が急を聞いて救援に駆けつけ、乏しい衣服や食料を進んで遭難者に提供し、遺体収容や生存者の治療に不眠不休で奔走した。生存者は海軍の金剛、比叡の2艦により本国に丁重に送還された。
- 10) ただし、新聞報道においては、ロシアを刺激することを恐れて、トルコの本音を顕わにする論調は制限された。ジャーナリズムは可能な限りヨーロッパ発の報道を転載するという方針に甘んじねばならなかった(Şahin, 2001 : 140 ; 池井, 2004 : 173)。
- 11) 日露戦争に対するトルコ知識人の反応を論じたものとして、(エセンベル, 2003) がある。トルコの汎イスラム主義運動への影響については、(エセンベル, 2004) を参照。
- 12) ドイツ皇族の日露戦争観戦に関しては、(安岡, 2003 : 77) を参照。
- 13) 8月10日の黄海海戦で敗れたロシア旅順艦隊の防護巡洋艦「アスコリド」と駆逐艦1隻が上海に逃亡し、武装解除の上抑留されているが(大江, 1999 : 189)、これを指すものであろうか。
- 14) イギリス出身の博物学者で、当時神戸に滞在していたゴードン・スミスも、日本の民衆について同様の感想を日記に書き記している。それを紹介した伊井春樹によれば、遼陽陥落に際して、「スミスの住む神戸の町も、店先には『遼陽勝利』と書かれた提灯が飾られ、人々は喜びの表情をたたえて通りを歩いている。歴史的な興奮すべき出来事でありながら、だが人々は静かで、どこことなく威厳のある態度を示し、祝い一色というわけでもない」とスミスは観察する。ただ、ペルテヴとは異なり、スミスはこうした日本人の静謐さを、戦勝の影で多くの犠牲者が出たに違いないという代償の事実を恐れているからにほかならない、と解釈している(伊井, 2007 : 72, 193)。

【文献一覧】

- Çalık, R., 1996, “Colmar Freiherr von der Goltz (Paşa) ve Bazı Görüşleri” in *Atatürk Araştırma Merkezi Dergisi*, Cilt : X II, Sayı : 36.
- Demirhan, P., 1942[1937], *Japonların Asıl Kuvveti : Japonya Niçin ve Nasıl Yükseldi?* (İkinci basım), Cumhuriyet Matbaası, İstanbul.
- , 1943, *Hayatımın Hatıraları : Rus-Japon Harbi 1904-1905 (Birinci Kısım) İstanbuldan Ayrılışından Port Arthur Muharasına Kadar*, Matbaai Ebüzziya, İstanbul.
- エセンベル, S., 2003, 「トルコ人の目からみた近代日本」小島 孝之・小松 親次郎編『異文化理解の視座 — 世界からみた日本、日本からみた世界』東京大学出版会。
- , 2004, 「日露戦争と日土関係 — 20世紀における日露戦争の記憶」防衛庁防衛研究所編『日露戦争と世界』(平成16年度戦争史研究国際フォーラム報告書)。
- ガルシア, M.D., ? , 津島 勝二訳『日本海海戦から100年 — アルゼンチン海軍観戦武官の証言』鷹書房弓プレス, 2005 (『日本海海戦 アルゼンチン海軍観戦武官の証言』社団法人日本アルゼンチン協会, 1998を増補)。
- Hamilton, I., 1907, *A Staff Officer's Scrap-Book during the Russo Japanese War* (2 vols), London (松本 泰訳『思ひ出の日露戦争』, 平凡社, 1935)。
- ハワード, M., 1995, 「ヨーロッパ諸国より見た日露戦争」桑田 悦編『近代日本戦争史 第1編』同台経済

懇話会。

イブラヒム, A., 1910, 小松 香織+小松 久男訳『ジャポンヤ —— イスラム系ロシア人の見た明治日本』第三書館, 1991。

伊井 春樹, 2007, 『ゴードン・スミスの見た明治の日本 —— 日露戦争と大和魂』角川選書。

池井 優, 2004, 「日露戦争とトルコ」『歴史読本』49 巻 4 号 (特集・日露戦争 100 年目の真実), 新人物往来社。

Komatsu, K., 2007, “1904 Rus-Japon Harbi ve Türk Modernleşmesinde Japon İmajı” in *Toplumsal Tarih*, Sayı : 160.

松谷 浩尚, 1986, 『日本とトルコ —— 日本トルコ関係史』中東調査会。

内藤 智秀, 1934, 「トルコ人の眼に映じたる日露戦争」『歴史教育』9 巻 3 号。

———, 1968, 「日露戦争とパン・イスラミズム」『国際政治』36 号。

中井 晶夫, 2004, 「スイス観戦武官の記録」『軍事史学』40 巻 2・3 合併号 (日露戦争(一) : 国際的文脈), 錦正社。

大江 志乃夫, 1999, 『バルチック艦隊 —— 日本海海戦までの航跡』中公新書。

Şahin, U. F. Ş., 2001, *Türk-Japon İlişkileri (1876-1908)*, Kültür Bakanlığı Yayınları, Ankara.

安岡 昭男, 2003, 「日露戦争と外国観戦武官」『政治経済史学』438・439 合併号。